

1. 最近、一部において「家政工学」という概念が提議されている。⁽¹⁾⁽²⁾ 工学を Technology としてとらえれば、このような言葉は成立しうが、内容のとらえかたには重大な疑義がある。すなわち、国民または人間の生活に関する学問の原泉をとらえていないこと、応用についての科学の構成を見おやまつていることである。このようなことは所謂「家政学原論」がいかに不毛な自己満足な性格の一面をもつかを示そう。
2. すでに論じたように⁽³⁾ 家庭科の教職科目となつている「家庭機械および電気」のようなヒト：モノ系の学問においては、一般消費者に役立つ学問の姿勢をとるべきことがその原泉であり、これは生活についての他の局面ヒト：ヒト系においても同様である。また工学のような応用科学が生活についての学問体系の基礎学となりえないことも、すでに別に論じている。⁽⁴⁾
3. 所謂「家政学原論」の範囲において家政学史や経営論等にはみよべきものがあった。一般には家政学論であり家庭経営管理論であり、ある場合は家政学概論である（なお内容的に学術論文の域に達していないものがある）。切に内省を求めたい。⁽⁵⁾

注記(1) 松田毛美子、家政工学への提言、本学会才23回総会研究発表、1971.10.

(2) 森昌幹、松樂実、家庭機械および電気、P.5, 1971, 4, 森北出版。

(3) 上林博雄、生活機器学の定義とその範囲、本学会関西支部研究発表、1959.5. その他。

(4) 上 上、住居生活学の体系的研究(901, 902, 903) 本学会才18回総会研究、関西支部才28回研究、才19回総会研究、1966.10~1967.10.

(5) 参考として、上林博、住居学のあり方についての研究(901-米田おはる教授(H.E)の範囲と方向)(902-H.Eと「家政学」の展望、本学会研究発表。